対談：協働の場 “ゆめプラ” 20年のあゆみ



《対談者》

武豊町民会館第二代館長	竹本　義明
武豊町民会館初代事務長	大岩　利康
NPOたけとよ初代理事長	櫻場　敬信
NPOたけとよ第二代理事長	犬塚　久夫
NPOたけとよ第三代理事長	左右木星志
NPOたけとよ初代事務局長	高橋　洋子

《司　会》

NPOたけとよ副理事長	高木　正博

2025.7.29(火)　情報考房にて

ゆめプラの立ち上げと協働による運営の始まり

高　木：10周年の後で作った記録誌の中では、武豊町民会館＝ゆめたろうプラザ(以後、ゆめプラ)がオープンするまでの話を聞きました。昨年、開館20周年を迎えて発行するこの記録誌では、20年間の活動内容に基づいて、なぜ続いたのかを含めて、皆さんにお話を伺いたいと思います。
まず、町と住民、ここでは主にNPOたけとよになるのですが、その両者の協働による運営の始まりと、ゆめプラの立ち上げについて復習したいと思います。武豊町民会館初代事務長として深く関わった大岩さんはどうでしょうか？

大　岩：一般的な「文化ホール」の建設では、役場の職員と設計事務所とが打ち合わせをしてプランを作って、それを審議会等にかけてOKになってから、住民に公開するという流れだと思います。それを基本構想から住民に参加してもらうワークショップを始めたわけです。私は最初、「ワークショップ」という言葉すら知りませんでした。
まず、住民参加を意識した基本設定を条件にした「プロポーザル*」方式を採用しました。その結果、住民に参加してもらって基本設計を作っていくというプロセスを提案した設計事務所を採用しました。その方式がワークショップだった。いよいよワークショップを始めたら、大勢の方が参加してくれた。その中にはまるっきり文化ホール建設反対の方もいて、ホールなんかより温泉施設を作ろうという意見も出ました。でも他の参加者から「私たちはホールを作ろうと集まっているのだから、ホールについての意見を出してください」という一言があり、それから反対する方々があまり出席しなくなってきた。そこから、どんなホールを作りたいのかという目的に向かって進んでいった。それと、プロポーザルで選んだ「都市造形研究所」が、町民の声を生かすような流れでワークショップを進めていきました。町の職員にもよく言ったんですが、町民の参加者は、土・日にワークショップに出てくれる無報酬ボランティアで集まってきた人たちだが、我々は給料をもらっているんだから頑張りましょうと。
住民参加型ということでワークショップを始めて、基本構想を練り、図面が出来上がって、工事が始まり、だんだん建物が見えてきた。そんな時に、住民の参加者の一部から「事業を作ってみたい、やりたい」という声が上がった。そこで準備事業実行委員会の組織を作り、そこに委託をして企画づくりを進めてみました。出演者との交渉、ポスターの作成・チケットの作成などを自分たちでやってみようということで進めました。皆さん本当に意欲的に取り組み、結果もよかった。我々も「これならいけるな」という気がしてきました。そこで、実行委員会という形では継続が難しいので、実行委員の中から「NPO*」という考え方が出てきた。当時は、私もNPOのことが全然わからなかったので、勉強しながら進めました。この組織化には、町民との関わりに熱心な町の職員が、県との交渉とか審査の申請書類の起案とか非常に意欲的にやってくれました。そうして「NPOたけとよ」が立ち上がって、今まで続いてきているという感じです。

高　木：ゆめプラの事務室では町の職員とNPOたけとよの職員が、初めから一緒に机を並べて仕事をしていました。何か狙いがあったのですか？

大　岩：私は最初から一緒に机を並べてやった方がいい、そして、少しずつNPOたけとよに任せていった方がよいと思っていました。役場の職員の中には「本庁の社会教育課にいればいいじゃないか」という意見もありましたが、我々が本庁舎にいて、文句を言うだけではなく、我々も助けてもらい、NPOたけとよの手助けもするというように、お互いが助け合う。そんな中でやっていきたいなと思い、同居という方法を取りました。

＊プロポーザル＝主に公共事業や企業の業務委託において、企画力や技術力、経験などを競って、最適な発注先を選ぶ選定方式のこと
＊NPO＝（民間の）営利を目的とせず社会的活動を行う団体

高　木：いよいよ2004年9月にオープンしたのですが、一番心配だったことは何ですか？

大　岩：一番心の中にあったのは、これで良かったのかなということですね。いろいろ迷っても、やらないといけない、決断しないといけないという気持ちでしたね。今は20年も続いてすごいと思っています。そのポイントの一つには、歴代の「NPOたけとよ理事長」さんが名誉職という気持ちで務めるのではなくて、何事にも率先して取り組んでいることがあると思う。理事長もそれから会員・NPOの職員も、みんなが同等の立場で話すことができる。

高　木：高橋さんは20年間NPOたけとよの事務局長として勤められたのですが、いよいよオープンという時、何が不安でしたか。

高　橋：ゆめたろうプラザの知名度も信頼度も全然ないので、チケットが売れるだろうか、赤字になったらどうしようと思っていました。

高　木：竹本さんは館長として18年務められましたが、ここに赴任された時どんな印象でしたか？

竹　本：本当に頑張っているなという感じでした。今、私なりに、どうしてゆめプラの活動が20年続いてきたかということを考えていて気がついたのが、「行政と住民との協働」という形が武豊町以外に全国にはないということです。武豊町では行政と住民・NPOたけとよとが、大岩さんが言うようにうまく連携した形が出来上がったということです。それは今までの運営の仕方とは違っています。やはり、行政が住民の意欲を引き出す姿勢と、住民が活動する場所を望んでいる中からこのような形が定着したんだと思っています。一番のポイントはやはり行政だと思います。多くの行政は、なかなか住民参画まで歩み寄らないと思います。

高　木：櫻場さんは初代の理事長として10年間務められましたが、最初はどうでしたか？

櫻　場：理事長の打診を受けたのが、ちょうど定年が延長になり、会社からはいつまでいても結構ですと言われていた時だったんです。仕事でやりたいことも残していたんで悩んだけど、ゆめプラのことをやらなきゃいけないと思ったし、それに興味もあったので結果的にNPOたけとよに入って理事長を引き受けたわけです。会社の方を選んでいても、それなりにまた違う人生があったと思うけど、NPOたけとよの活動を20年やってみて、間違ったとは思っていません。



青木孝憲町長（当時）と懇談



NPO たけとよ設立総会にて

高　木：犬塚さんは第二代理事長として5年務められましたね。どうでしたか、舵取りは？

犬　塚：やっぱり「住民参加型」でいろんなことをやれてよかったと思う。実はNPOたけとよが立ち上がった当時は何も知らなかった。当時の武豊町の教育長に「ジュニアオーケストラを作りたい。どうしたらいい」って言ったら、「竹本館長のところに行って相談せよ」と言われたことからゆめプラとの関りを持つようになった。ゆめプラの「東京佼成ウインドオーケストラ実行委員会」や「宮川彬良＆アンサンブル・ベガ実行委員会」の実行委員長になったりと、いろいろやっていた。それから武豊春の音楽祭に参加して、そこで櫻場さんから声をかけられた。それまで、ゆめプラの協働の取り組みについて全く分からなかったけど、足を運んでみたら、面白さや良さがとにかくどんどん広がっていくんだよね。だから、これからもいろいろな人にゆめプラに来てもらって「あ、これ楽しいね」とか「居心地がいいね」っていうのを感じてもらえるようにしていくと、いいのかなと思う。それが今まで20年やってこれたことに繋がると思う。

高　木：第三代理事長の左右木さんは、今年で理事長として5年になりますが、やってみて、どうですか？

左右木：私がゆめプラに関わったのは、「武豊春の音楽祭実行委員会」です。音楽祭の立ち上げの時から活動していましたが、このNPOたけとよは全く知らなかったです。でも、櫻場さん犬塚さん髙木さんも実行委員会に入っていて、皆さん僕より年が大きいのだけれど、すごく元気(笑)に活動しているのが見えて、これがNPOたけとよなのか、じゃ入ってみようかなと自分から入ったんです。だからその時は、ゆめプラの運営やNPOたけとよが何をやっているかとか、全く分からずに飛び込んだ。
今では全国でも珍しい運営の仕方だということがよく分かった。NPO法人、いわゆる住民が中心になって企画と運営ができているというのが評価が高いところだと思う。他の地域でもいろいろな活動をしている人たちがたくさんいるけれども、なかなか行政と仲良く協働して進めることができていないのではないでしょうか。ゆめプラでは、それをぶれないで継続できているんでしょうね。大岩さんが言っていたように、まず住民に参加してもらって実際にやってもらうことから始まっている。そういう場所づくりを行政がしたということはすごいなあと思います。本当に住民にとって輝ける場所であったり、生きがいを味わえる場所であったりする。それを上手に行政が作ってくれたのではないかなと思う。入ってよかったかなと思っています。

運営の拠り所は「文化創造プラン」

髙　木：武豊町にはゆめたろうプラザが開館したときから「武豊町文化創造プラン」があります。これは他の市町ではないところがほとんどのようです。どんな経緯でいつ頃できたかを、大岩さんにお聞きしたいのですが？

大　岩：建設専門委員会の時から検討されて、2003年に完成し施行されています。委員の名古屋大学の清水裕之先生がいち早く声を上げて話が進みました。ゆめプラの運営を進める上での拠り所となるのものが必要だと考えて、最終的には武豊町全体の文化創造についての「マスタープラン」としてまとめられました。

竹　本：はっきりした数字は今わからないけど、いわゆる都道府県レベルでは半分ぐらいがマスタープランを作ってるんですけど、市町村で作ってる所は極端に少ない。

高　橋：オープン当初もそうですが、今でも「武豊町文化創造プラン」があることで、それに基づいて運営や企画をやることを基本にしています。また、実はこれで私たちが守られているみたいなところもありました。それは、町の体制が変わっても、この「プラン」がある限りは土台の部分が揺らがないという互いの拠り所になっているということです。

髙　木：NPOたけとよは自分たちの好きなことをやっていると、一般の町民の方や、行政の中にもそういうことを言う人がいるかもしれない。そんな時、そうではないという根拠にもなり、あるいはそんなふうに言われるようになってはいけないという一つの指標になっているとも考えています。それに加えて、私たちNPOたけとよが、委託契約で受けている委託料というのは、もとは税金なんだということを深く自覚しながらやらなければいけないと思っています。


2015年度 学校アウトリーチ BLACK BOTTOM BRASS BAND

櫻　場：確かに好きでボランティアをやっているんだけど好きなことだけやっているわけじゃない。どうやって地域の人たちに楽しんでもらえるかを考えている。

地域の皆さんの声を活かす取り組み

髙　木：地域の皆さんの意見を聞く努力の一つとして、開館後と20周年に合わせて小中学生にアンケートをとっていますね。

櫻　場：オープン2年目から3年連続で取りました。保護者の意見を書く欄もつけていた。子どもだけではなく、広く意見を求めようと考えたからです。子どもたちのリクエストもいろいろあった。子どもたちからは「でんじろうのサイエンスショー」、ノーベル賞を取った人の話、オリンピックのメダリストの話を聞きたいという声があった。この三つは3年続けて出てきていた。


2010年度
米村でんじろう
サイエンスショー


2013年度
益川敏英講演会

保護者からは、子どもたちが参加できる講座の申込開始日が土曜日が多いが、土曜日も仕事の保護者はなかなか申込みに並べないという意見があった。それを受け、人気の事業は抽選で参加者を決定する方式にした。
「でんじろうのサイエンスショー」は、ゆめプラ開館5周年にやろうとしたが、都合で翌年の2010年の謝恩事業として行った。すると、当初予定していた予算では足りなくなった。定例会で会員の皆さんに相談したら「子どもたちの希望だから何とか実現したい」という声が多く出た。その結果、一口1,000円で地域の人たちに協賛をお願いすることになった。ほんとにみんなで廻った。すると、予定していた金額より多く集まり、子どもの入場料を予定の半額にできた。もう一つびっくりしたのは、朝の4時にはもう寝袋を持って並んでいる人がいた。売出しが2月末か3月初めのまだ寒い時だったからほんと心配した。当日は666席が満席になった。輝きホールが、子どもたちの歓声で揺れたように感じた。
ノーベル賞の博士の話は、2013年に名古屋大学の益川敏英先生に講演をお願いした。大変気さくな先生で子どもたちに楽しい話をしたいと言ってくれました。講演会もたくさんの子どもが集まりみんなワクワクして聞いていた。

「芸術と科学のハーモニー」と「知多半島春の音楽祭」

櫻　場：ゆめプラのテーマが「芸術と科学のハーモニー」ですが、これが実に良かったんじゃないかと思う。芸術だけだったら、こんなに続かなかった気がする。

竹　本：そこはすごく先見の明があって、理性と感性とか、科学あるいは技術と芸術というのは、14、5年前は全く水と油という関係にあった。それが今は一般的にもこの組み合わせが認められる。いち早くやったわけですよね。

髙　木：私もオープンの前に聞いたとき、疑問に思いました。しかし、考えてみると、どちらも創造性が深く関わっていることに気づきました。美術であれ音楽であれ「美」を追求するには、感性だけではなく理性が影響するし、科学的な思考には気づきという感性が重要になり、その気づきをきっかけに、理性をもとに科学的思考を深めることになる。一人の人間の中に、感性と理性は両方とも大切なもので、それが融合して人間性となるのだと思います。そう考えると、「芸術と科学のハーモニー」というテーマは、人間性を追求するということになるのだと気がつきました。このテーマのおかげで芸術と科学に関する事業をこのゆめプラで進めることができると感謝しています。
これは大岩さんにお聞きしたいのですが、開館して初めの5年間はNPOたけとよの事業数よりも、ゆめプラ直営(教育委員会担当)とか実行委員会が担当した事業数の方が多かったんです。何か思いや配慮があったということでしょうか？

大　岩：はじめからあんまり忙しくしてもね。一つひとつの企画をじっくりやってほしいと思っていた。お互いに経験を積む中でノウハウを積み上げ、お客様が喜ぶいい公演を作っていきたいと思っていた。それに、実行委員会でも多くの人に関わってもらいたいという気持ちがあった。

高　橋：実行委員会事業として代表的なのが「モーニングコンサート」と「春の音楽祭」ですね。「モーニングコンサート」はオープンの時に立ち上がったもので、町民を中心とした実行委員会で今も継続して開催しています。地域の演奏家を募って、響きホールを無料で提供して年6回の演奏会を実施しています。
音楽祭については、オープン前から少しずつ始まっていて、オープン後は2年に一度の実施を基本に続けています。ゆめプラの二つのホールやコリドールなどのオープンスペースを貸し出し、演奏者を公募して実施しています。その実行委員会の中にはNPOたけとよのメンバーも参加しています。

髙　木：いろんな資料をまとめていて気がついたのが、ゆめプラのテーマ「芸術と科学のハーモニー」のもと、市民と行政との協働事業として実行委員会で行った大きなイベントの一つが「小惑星探査機『はやぶさ』帰還カプセル等展示inたけとよ」の事業だったと思います。
確か、武豊町が展示を希望してJAXAに応募してゆめプラで行うことになった。その話がNPOたけとよの定例会で出た時に、たまたま他の科学館で展示を見た人が「まるで上野動物園のパンダみたいにカプセルが置いてあるだけで、ただ見てくださいという感じだった」という意見を出した。そうしたら「どうせやるんなら、もっと学びのある取り組みにしたい」と言って、実行委員会の立上げの時に、櫻場さんはじめNPOたけとよからもたくさんの人が入った。その後、他の町民の方たちと一緒になっていろいろ案を出し合っていった。あの時に「学びがある」という発想の仕方がNPOたけとよらしいな、やればいいではなくて、どうやったら学べるか、面白くなるかって考えていくのが「民の力」の一つの表れだなと強く思いました。期間は2011年8月4日～7日の4日間でした。延べで1万4千人を超える来場者があった。当時の武豊町の人口が4万2千ちょっとですから、その3分の1の来場者があったということになります。武豊町のはやぶさ展はクレイジーな企画だとSNSで称賛されましたね。この実行委員長は櫻場さんだったんですが、その時の思い出みたいなものはありますか？


2011年度 小惑星探査機「はやぶさ」帰還カプセル等展示

櫻　場：みんなの意見から、実物大模型を作ろうということになった。当時NPOたけとよの理事で、宇宙に興味をもっていたMさんが中心になって実物大模型、それも本物そっくりなものを作ろうと頑張った。

犬　塚：実物大模型だけではなくて、文化ホールの強みを生かしていろんなものをやった。小さい子から大人まで楽しめるものにしたいと考えて、紙芝居をやったり、講談をやったり、はやぶさの映画もやった。それからスイングバイの仕組みが分かる実験セットを作って実際に参加者にやってもらった。本当にいろいろあった。そしてどれも楽しいものばかりだった。はやぶさのコスプレーヤーにも来てもらった。

櫻　場：あれをやったことで、普段は文化ホールに来ないような人がゆめプラに来た。ゆめプラの認知度もぐっと上がったね。NPOたけとよの理解者も増え、実行委員会に入っていた人の中からNPOたけとよに入った人が結構いましたね。

髙　木：なるほど、市民と行政が協働するいろいろな実行委員会がゆめプラの中で活動していったわけ

ですね。
その中で、文化ホールとして大きな意味合いを持った事業が「知多半島春の音楽祭」だった気がします。きっかけは2年に一度の「武豊春の音楽祭」だったと思います。それを知多半島全域に広げた音楽祭として実施した。知多半島中から会場を募集して、演奏したい人は知多半島以外からも広い範囲で公募し、その両方をマッチングする内容でした。その「第1回知多半島春の音楽祭」が2013年1月から３月でした。この話は竹本さんから出たと思うのですが。

竹　本：「ペニンシュラ*構想」の発端は、前任の安藤隆之初代館長で、実際に「武豊春の音楽祭」が実績を積み、認知度も上がり定着してきた。そこで、やっぱり知多半島は一つということでやっていくと、相当大きなインパクトがあるイベントになると私も考えました。文化・芸術が一部の地域で活性化し、それが他の地域にも広がっていき花開いていくといいなという気持ちでした。しかし残念ながら現在は「武豊春の音楽祭」だけになっています。私たちが5市4町に声をかけたのが、ちょっと早過ぎたのかなと思ったりしてますけど。

髙　木：第1回の実行委員長が犬塚さんでしたね。実行委員長で大変だったんじゃないですか？

犬　塚：当時の竹本館長さんに知多半島に広げたらどうかなと言われた時に、まず僕が思ったのは予算のことです。「武豊春の音楽祭」の時、町内の企業を回って100万ぐらい集めていた。それなら、今回は200万集めれば、パンフレットぐらいできるなと思っていた。確かに5市5町を回ったり、知多県民事務所で各市町の行政関係者に説明会をしたりして大変だったけど、今思うと本当に楽しかった。いろんな人と接することができたのは自分自身にめちゃくちゃプラスになった。だからあれがなくなったのは、ちょっと残念だなと思う。その上、文化庁から助成金を出してもらえることになり、町の職員も頑張ってくれた。そのおかげで一気にスケールが大きくなった。5市5町のいろいろなところに顔出して、知らなかった人と触れ合うと、一人ひとりの身近に音楽がある気がしました。その地域のホールでコンサートを開くだけではなくて、できそうな場所を探しては音楽会をやる、可能な範囲で。これって、すごいなと思った。それも形式にとらわれずにやれるからもう最高だった。あれは本当に楽しくて仕方なかったね、僕は。だから知多半島中、70カ所以上の会場を回ったもんね。


ゆめホタル ® キャンドルナイト


金環日食を見よう


現代アートの鑑賞「Magic Shadow」（愛知工業大学情報科学部）


知多半島春の国際音楽祭 合唱編成「そうれっしゃがやってきた」

時代の流れは「指定管理」？ その時ゆめプラは…

髙　木：2016年の4月の町議会でゆめプラへの「指定管理者制度の導入については考えていない」という町からの答弁がありました。そこに至る様子を聞きたいのですが。

髙　橋：一時期すごく「指定管理者制度」を取り入れよとの声が、議会の中や一般の方々の中からも出てきた時期がありました。しかし、あの答弁は、「文化創造プラン」の中に,「現在の運営体制に問題がなければこの体制で継続する」ということが書いてあることと、「協働のまちづくり」を目指す町の姿勢を踏まえての内容ではないでしょうか。詳しいことは分かりませんが。

犬　塚：そうですね。その頃に理事長をしていましたが、NPOたけとよで「文化のまちづくりセミナー」を開催して、町民や議員さんも交え多くの人と勉強しましたね。

髙　橋：2008年と2013年に、帝塚山大学の中川幾郎先生(現在帝塚山大学名誉教授)を呼んで講演会を行いました。2014年は連続講座で3名の講師をお招きして話を聞きました。静岡文化芸術大学の片山泰輔先生(現在青山学院大学総合文化政策学部総合文化政策学科教授）、指定管理会社のアクティオ(株)の薬師寺智之さん（現在浦和レッズダイヤモンズ）からその実態の話を聞き、名古屋大学の清水裕之先生(現在名古屋大学名誉教授)に取りまとめていただきました。どっちが良い悪いと結論つけずにフラットな感じで現状はどうだろうみたいな話をしてもらいました。

犬　塚：いい意味でメリット、デメリットの両面を、住民、行政、NPOたけとよのメンバーのお互いが認識する講演だったと思います。ただ、NPOたけとよの中の運営の仕方とか考え方が変わったということはありませんでした。その時、「もし指定管理者制度を打診されたらどうする」と会員に聞きましたが、多くから「指定管理者制度のエントリーはやめよう」という声が出ました。ゆめプラの成り立ちから、現在の運営の実際に関わるところまで、そのベースには町との協働があるし、それこそ方向が変わることになると考えたのです。

＊ペニンシュラ＝半島

一番大事な「お金」のハナシ

髙　木：町からの予算面でよかったこと、逆に困ったことはありますか。

髙　橋：ゆめプラがオープンしてからは以前からの信頼関係の中でいろいろな事業を進めていった。事務長が大岩さんから他の方に替わると、町職員が事業のやり方がわからなくなってきて、その分の予算もみんなNPOたけとよの方へつけてくれた。そういう意味で予算はだんだん膨らんできました。でも、武豊町の企業の法人税が減ったり、学校の耐震対策に予算をかなり廻したりして財政状況が厳しくなり、いろんなところを全部切り詰めていった。そこから、事業費がガタッと減ってきた。それまでは事務長さんが影響の少ないところを削りながら、予算申請を上手に乗り切ってくれたんだと思うけど、さすがにもう切るところがない状態で、今は事業費が半分以下になってきている。でも、学校アウトリーチはチケット収入はないけれども続けていきたいし、他にも地域の人に提供したい企画はあるし、NPOたけとよとしては厳しい財政状況です。

活動の継続に必要なこと

髙　木：最後に継続するために必要なこととしては、どんなことが考えられるかということを一人ひとりにお聞きします。

竹　本：やっぱり継続するには予算が必要ですね。武豊町も財政的に厳しいかもしれないけど、予算を確保できるような運動っていうか、取り組みをしたいなという気がします。

犬　塚：二つあるんだけど、一つは多くの人が関われるイベントがあると、今まで足を運ばなかった人も来てくれて、ますます活性化するのかなと思っている。二つ目はやはり、予算の件です。確かに、我々は一生懸命にその予算内で努力しているのだけれど、いよいよ魅力ある事業ができなくなってきているのではと思う。

櫻　場：最初はみんな熱意があっても、やっぱり熱は冷めるんだよね。そういう時にみんなを沸き立たせるイベントが必要だと思う。もちろん、町の取り組みもNPOたけとよの取り組みもお互いに認め合い、そこに参加した住民も喜び、どちらも評価するような、そういう仕組みが作れないかなと思っている。そんなイベントをみんなですることで、新陳代謝というか、新しい人もどんどん入ってくることになると思う。

左右木：やっぱり予算だと思います。それと、修繕などハード面での取り組みも大切です。計画を立ててはいるけれども、なかなかうまくいかないのかもしれないですが。それと、ゆめプラが、これからも武豊町と住民の人たちから大事な場所だと思ってもらえるようになることだと思う。昨年20周年の年で記念事業をいろいろやってきて、地域の人から「武豊にこういうところがあって本当に良かった。ずっと来るからね」と言ってもらえた。


NPO たけとよの仲間

高　橋：予算のことですね。NPOたけとよに資金が直接入るような仕組みも考える必要がありますね。

高　木：ありがとうございます。私が思うのは、利用する人たちの若者率を上げることと、ゆめプラの集客対象地域を広げることです。ゆめプラに来る人たちは武豊町の人たちだけではないということを、もう一度認識して周辺の人たちとの連携を探っていく必要があるのではないかと思います。
本日は協働によるゆめプラの運営が、何故20年続いたのか、また、これからも続けていくためには何が必要かなどを皆さんと考えることができました。
まだまだ掘り下げなくてはならないこともあるとは思いますが、それは別の機会に譲りたいと思います。その時には、また別の若いメンバーが語り合うことになっていることを期待して終わりたいと思います。本日はお忙しい中ありがとうございました。

まとめ

20年続いてきたポイントをまとめると

- 町が住民と積極的に協働しようとする姿勢を持っていたこと
- 町職員とNPOたけとよの会員が互いに助け合う姿勢があったこと
- 町がゆめプラをNPOたけとよだけでなく、多くの町民の活動意欲を引き出す場と位置付けてきたこと

になるのかなと思います。

